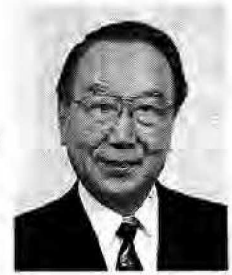


## 21世紀の開幕を前に

学 長 大橋 秀雄



12世紀に入ると、北イタリア、フランス、イギリスの諸都市で次々に大学が誕生し、最高の知識を授け、また研究を通じてそれを拡大する場として、学術の伝承発展に貢献してきた。最初は、神職、法曹、医者などの高度な職業に必要な知識が求められたが、その後新しい学術分野が生まれるにしたがって、大学もそれに応じて拡大されてきた。20世紀に入ると、科学や技術の重要性が急速に拡大し、理学や工学などいわゆる理工系が大学の大きな割合を占めるようになった。

20世紀は、科学の時代であると同時に、大学大衆化の時代でもあった。我が国では、同世代の40%近くが4年制大学に進学する時代となったが、大学（大学院を含む）が最高の知を継承・発展させる場であることは、依然として変わっていない。大学は教育と研究の二つの役割を担っているが、大学大衆化の影響をまともに受ける教育と、ますます細分化、先端化する研究との乖離は、もはや埋めがたいほどに拡大してしまった。かつては、学生を研究の場に誘い込むことが最高の教育と考えられていたが、このようなフンボルト的大学観は、もはや古き時代のノスタルジーに変わってしまった。

大学における研究は、アカデミズムの牙城としてもっばら真理の探究に向けられてきた。自然科学の領域でいえば、より細かく自然を観察し、より一般性のある法則を発見して、森羅万象の底に潜む自然の摂理に迫ることが最大の価値とされてきた。研究をドライブする原動力は真理への希求であり、まさに Science for Science であった。

20世紀における科学の発展と、それに基づく技術の飛躍的進歩によって、研究者に対する期待、ひいては大学に対する期待も急激に変わってきた。今やすべての国で、科学技術は国策の重要な一部を占めるようになった。先進国は、その豊かさを一層確かなものとするために、途上国は、一刻も早く貧困から抜け出して豊かな国の仲間入りを果たすために。研究者は、そのための尖兵に変わりつつある。

昨年7月1日、6日間にわたってブタペストで開催された世界科学会議(World Conference on Science)は、21世紀における科学の役割を述べた宣言文(Declaration)を採択して閉会した。その会議に参加していた筆者は、科学技術のステークホルダーが、少数の研究者から社会全体に広がっていることを痛感した。宣言文を開けてみると、そこには Science for Progress, Science for Development, Science for Peace などの言葉が踊っている。これまで主役の座にあった Science for Science は、舞台の片隅に押しやられそうな状況である。

このような状況に対応して、大学における研究は大きな変貌を迫られている。Science for Science の具現である基礎研究は、その重要さに変わりはないものの、それだけを追い求めることは許されな